

学位論文題名

レールモントフ『現代の英雄』研究

－手法としてのアイロニー－

学位論文内容の要旨

【要旨】

本論文はレールモントフ『現代の英雄』（1840）における、主人公ペチョーリンの人物像の提示の手法に着目し、この人物像が持つ曖昧な複雑性の根拠を解明しようとした研究である。

ペチョーリンは、後のドストエフスキー『悪霊』の主人公スタブローギンなどロシア文学史上の「悪魔的登場人物」の淵源とされる一方、プーシキンのオネーギンやゴンチャロフのオブロモフなど、自己の存在意義に苦悩するいわゆる「余計者」の系譜にも位置づけられる、複雑な矛盾を抱えた人物像である。本論文ではこうしたペチョーリンの複雑な人物像が、彼の表明する思念や哲学以外にも、人物像の提示の手法や、作品全体の構成との関係などを含めた多面的な問題設定によって考察されている。考察ではコンピュータによる語彙統計も利用され、語彙レベル、文レベルで小説のさまざまな細部の照応関係や矛盾が丹念に分析されており、その結果この人物像の矛盾する複雑さの根拠として、主人公に対する作者レールモントフのアイロニーに満ちた関係があることが論証されている。

第1章は『現代の英雄』批評史の概観である。これにより作品の発表直後から20世紀にいたる各時代に、批評家がそれぞれの抱える問題意識をこの作品に投影し、いつの時代にもこの作品がアクチュアルなものとして受けとめられていたことが明らかとなる。この小説がこうした多様な解釈を許容するのは、主人公像にある種の「捉えがたさ」があるからだと考えられ、第2章以下ではこうした「捉えがたさ」を分析するために、主人公に対する作者のアイロニーに注目し、これを4つの視点から論じている。

第2章では、『現代の英雄』で人物提示の手法として利用されている、言説の非客観性（疑わしさ）を出発点として、主人公の内面を明らかにするのように見える物語の展開が、逆にそれを語る言説の疑わしさを増幅させるというアイロニカルな展開を指摘し、主人公の言葉と行動の不一致の分析から、彼の抱える内面の荒廃が提示されている。

『現代の英雄』には三人の語り手が存在し、伝聞、第三者による見聞、そして本人の告白（手記）へと次第に描写が主人公の内面に迫っていく構成がとられているが、主人公の人物像の解明を期待させるこの構成は、むしろそれぞれの語り手の言説の疑わしさを露呈することになる。従って、ペチョーリン本人の手記もまた、率直な心情の吐露ではなく、自己正当化を含む。手記には、自らの行為について、主人公の疚しさを暗示する表現が多数指摘できる。その疚しさとは、彼があたかも必然のように語っている、他人を不幸に導く出来事が、実は彼自身の意志によるものであり、彼はその主人公を演じていることを内心自覚しているために生じていると考えられる。ペチョーリンがこうした手の込んだ振り舞いをするのは、自分の生のかたちが見出せないため、周囲に敵を見出し、それに挑戦し続けることによって自分の人生の倦怠を埋めようとするからである。こうした確たる自己を持たない主人公を、外面から内面へと至る形で浮かび上がらせるた

めに、レールモントフは言説の入れ子構造を用い、三人の語り手の言説の疑わしさを利用したことが検証されている。

第3章では『現代の英雄』を演劇的要素という視点から分析している。この作品には情景の描写だけでなく、登場人物や出来事の叙述にも、演劇に由来する語彙が集中してみられる部分があり、演劇との関連性が物語の重要な特徴となっている。本章ではこうした演劇的語彙を分析し、主人公に以下の四つの演劇的特徴が見られることが指摘される—①自己の活動の場を演劇的空間とみなし、そこで何者かを演じているという意識、②現実生活の出来事の連鎖を演劇的な筋立てとして手記で描き出していること、③他者の演技的行為に対する敏感さ、④他人を不幸に陥れる自分の立場を運命によって与えられた「役割」として悲嘆すること。これらの点を考察すると、主人公は一連の事件を「筋書き」と捉え、むしろ積極的に事態をその筋書きに沿って操作していることが浮かび上がる。しかし主人公は自ら演出したはずの結果どおりに事が進むと、そこで自分が果たす「他人の不幸に手を下す」役割を嘆く、という矛盾に陥っている。18世紀以降『現代の英雄』が書かれた頃までのロシアでは、貴族社会において人前での振る舞いは演技と意識されており、それが日常化していた。つまりペチョーリンは、そうした貴族の常態であった演技性を実演しつつ、しかし最終的には引き受けようとはしないことになる。それは演技的な生活に倦怠を感じ、その生活をすでに過去のものとみなしながら、それに変わるものを見出せない主人公の屈託した心情を描き出しているためだと結論づけられている。

第4章ではテキストに散在する、他の作家のテキストとの対話・論争を示唆する部分が分析されている。これによって『現代の英雄』が複雑な文学的コンテキストの上に成立していることが論証される。そうした前提に立ち、この小説の表題である「英雄」にまつわるイメージのある種のテキストと見なし、ナポレオン、バイロンといった実在の英雄が、作品の中でどのように「引用」されているかを分析している。

バイロンに関しては「ペチョーリンの手記」と『バイロンの日記』とが比較され、両者の類似性が指摘される。しかしここでは、この類似性はバイロンの影響ではなく、主人公の造形のための手法と見なされている。バイロニズムに対するシニカルな評価と、バイロンに酷似した告白を組み合わせることによって、主人公の屈折した内面が描き出されていると論じられている。

ナポレオンに関しては、ワーテルローの戦いと同じ日付の日記の記載に、ナポレオンが比喻として言及されている点が考察の対象となっている。その符合を、偶然ではなく、レールモントフによる意図的なものと見なせば、主人公とナポレオンとの一体性が強められると同時に、実際の英雄と、卑小な人間関係の中で朽ち果てていく「時代の英雄」との落差というアイロニカルな効果を確認できると論じている。

第5章では、小説全体に通底する、運命という概念を取り上げ、小説の末尾で示される主人公の運命論的思考との決別の意味について検討されている。小説の最終章「運命論者」はペチョーリンが運命を克服したかたちで終わっているが、この小説は特異な構成をとっており、章構成と時系列の順序が一致せず、最終章で描かれた事件の後も彼の人生は続き、別の出来事へとつながっている。この小説構成と事件の時系列の関係を分析した上で、「運命論者」が時系列上の前後に当たる他の章と強く結びつけられていることを論証している。このような密接な繋がりを元に、小説の末尾で運命論的思考と決別したはずのペチョーリンが、実はその後も運命という意識に苦しめられているアイロニカルな構図を指摘している。

結論では、各章の考察をふまえて、主人公に対する作者のアイロニーという概念がこの作品の解釈に重要であると論じられる。それは主人公の思考や哲学のレベルにとどまらず、小説の物語展開や構成のレベルにおいても、創作の手法として意識的に用いられており、その結果、常に作者のアイロニーが伴うこの主人公の人物像に、解きたい複雑性が付与されたという結論が導き出されている。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 大 西 郁 夫
副 査 教 授 安 藤 厚
副 査 教 授 望 月 恒 子

学 位 論 文 題 名

レールモントフ『現代の英雄』研究

－手法としてのアイロニー－

【要旨】

審査担当者により構成された審査委員会は本論文を精査した結果、その成果を以下のように評価した。

『現代の英雄』は、ロシア最初の心理主義小説と評され、主人公ペチョーリンの内面が克明に描かれた作品である。また短編小説、中編小説から長編小説へと向かうジャンルの変遷の過渡期に位置する作品でもある。5つの中短編を、主人公ペチョーリンを契機として連結するという複雑な構成を持った、この小説における主人公像は作品を読み解く鍵といえる。その主人公ペチョーリンは、悪魔的とも言われる行為の卑劣さと自己の存在意義についての精神的懊悩の深さを併せ持つ複雑な人物であり、その人物像はこれまでさまざまに解釈されてきた。本論文はこうした主人公像を考察の中心に据えて、主としてその造形のための手法という観点に焦点を当ててこの作品を解明しようとしている。そのためこの小説の構造や人物像について従来の諸説を検討した上で、これまで十分論じられてこなかった、①登場人物の言説の非客観性（疑わしさ）、②作品における演劇的特徴、③表題とも関わる「英雄」への小説における言及とそのイメージの援用、④小説の各章に通底する運命観といった論点を取り上げ、これらについて徹底的にテキストに即して主人公の言動を分析し、そこに認められる矛盾点を考察している。

本論文は、コンピュータによる語彙統計も利用して、語彙単位、文単位のテキストの精緻な分析と、関連する要素を作品のさまざまな箇所から抽出する緻密な読解に大きな特徴がある。それと同時に、これらの論点の解釈において、語り手の相関関係や、章の配列、テキストの時系列の配置といった作品構成までも視野に入れ、それを解釈の根拠に利用する分析手法は従来の研究にはみられない斬新で有効な着想である。これらの論点の分析から、主人公を提示する手法の中にアイロニーという概念を探り当て、ペチョーリンの人物像の複雑性の解明に一定の成果を得ている。

しかし若干の問題点も指摘された。作品そのものを分析した第2章から第5章までは、それぞれ独立した論点を扱っており、相互の関連性が必ずしも明瞭になっていない憾みがある。各章ではまとまった結論を得られているが、全体の結論に収斂していく論述の展開がやや弱い。また各章の方法論には若干のずれがあり、作品論であるのか作家論であるのか、あるいは文学史的な位置づけを試みたものなのか、一貫性をくみ取りにくい面がある。とりわけ第4章は前半と後半で論証の焦点に若干齟齬が見られ、文学的引用の解明なのか、テキスト分析なのか、不明確である等の指摘もあった。とはいえ、これらの問題点は全体の意義を損なうものではなく、本論文は従

来のルールモントフ研究には見られなかった斬新な見解と分析手法を提示し得ており、今後のルールモントフ研究の発展に貢献する問題提起をなしたものと認められる。

論文の一部はすでに国内学会でも発表され好反響を得ており、また2007年ヤロスラーヴリ（ロシア）で開催されたルールモントフ研究会では、第5章の内容をもとに報告を行い一定の評価を得るなど、国際的な水準にも十分に達していると認められる。

こうした審査結果に鑑み、審査担当者は全員一致で山路明日太氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。

なお審査の経過は以下に記すとおりである。

- 第1回 平成19年12月14日 審査委員会発足 各委員に論文の配布。
- 第2回 平成20年 1月16日 論文の内容検討。口頭試問実施の方法を確認し、質問を整理。
- 第3回 平成20年 1月21日 口頭試問実施。
- 第4回 平成20年 1月21日 口頭試問の内容を検討し、学位授与の可否を判定。
- 第5回 平成20年 1月24日 審査結果報告書原案を作成し、委員会で検討。